

概念化の ID 追跡モデルの提案 ～ 「認知文法」の図法の拡張～

要旨

本発表は、認知文法の枠組み (Langacker (1987, *et seq.*) で意味構造の記述のために使われる図式をより効果的な記述の道具にするための提案を ID 追跡モデル (IDTM) の名称で提示する。IDTM は概念化のモデルで、基本原理として次のことを仮定する。(i) 認知的に実在する個物は固有の ID をもち、それは抽象的な状態空間の中に軌道をもつ。(ii) 概念化はその ID の経路を追跡する過程からなる。IDTM は、解釈の一定した言語非依存的な意味構造の視覚化のための手法を提供する。

1 ID 追跡理論の導入の動機

1.1 認知文法の意味・概念構造の図式法の根本問題

Langacker (1987, *et seq.*) の認知文法の枠組みで意味構造の特徴づけに用いられる図式法は、動作連鎖 (action chain) が概念化にメタファー的に取りこまれているという考えの上に成立している。この考えは玉突きモデルと呼ばれ、そのモデルでは動作が基本的で、状態変化は派生的だと考えられる。これは Croft (1991) とも共有され、認知言語学で広く受け入れられている考えであるが、例えば定延 (2000: 150-154) が指摘するように、言語一般的なものだとは考えがたい。

以下では、玉突きモデルの対案となる記述的枠組みを ID 追跡モデル (IDTM) という名称で提案する。

1.2 ID 経路の概念と固有 ID 仮説

IDTM はエネルギー伝達メタファーを基盤としない意味構築のモデルである。そこでは状態変化が中心的な役割を演じ、動作はそこで生じる相互作用の理由づけのために

導入される媒介的なものと理解される．その枠組みの基盤にあるのは、次の ID 経路の概念である．

- (1) a. 固有 ID 仮説: 概念化可能な任意の要素は、常に固有の ID をもつ
- b. ID 経路仮説: そのような ID は時間に沿った抽象的な軌道、あるいは経路として概念化される

抽象的概念空間内に ID をもつ個物は相互作用し、相互作用のネットワークが形成される．IDTM はこのネットワークを意味構造に対応づける．

図1は三本の ID 経路の三つの時点 $t-\Delta t$, t , $t+\Delta t$ での時間切断面 $M(t-\Delta t)$, $M(t)$, $M(t+\Delta t)$ が相互作用する様子を表している．時点 t にはプロフィールがあたっている．

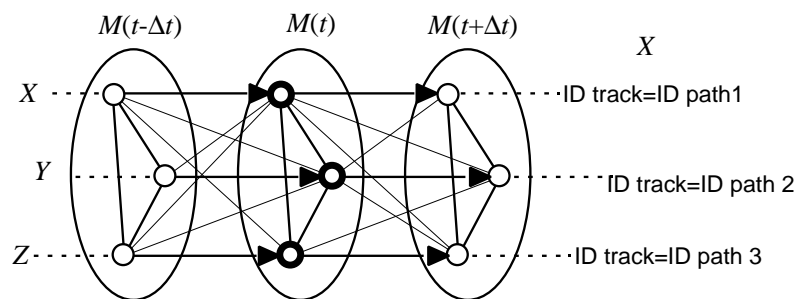


図1

この図で M の 内部には静的な二項関係の、二つの時間切断の間には個物の再帰的な二項関係と、動的な相互作用の二項関係のネットワークがある．

図1にあるような相互作用のネットワークからの有意な成分を選択するプロセスが概念化だと考え、それが Langacker の用語で言うプロフィール化 (profiling) に相当すると考える．

M は Fauconnier (1985, 1997) のスペースに相当し、この点で IDTM はメンタルスペース理論の拡張という側面をもつ．

2 ID 追跡理論が提供する具体的分析

IDTM の図法は認知文法の図法に対し上位互換性をもつ．この節では具体例を通じて、そのことを例証する．

2.1 IDTM における動作/因果連鎖の特徴づけ: BREAK の場合

動作連鎖の扱いが IDTM ではどうなるかを見るために、*break* を例に説明しよう。

- (2) a. *X break Y (into Z).* (e.g., *He broke the window (into pieces).*)
 b. *Y break (into Z).* (e.g., *The window broke (into pieces).*)
 c. *X break Y with W.* (e.g., *He broke the window with a hammer.*)
 d. *W break Y.* (e.g., *The hammer broke the glass.*)

(2)a, b の対比にある動詞の自他形の対応は、IDTM では図2-図3のように図示される。

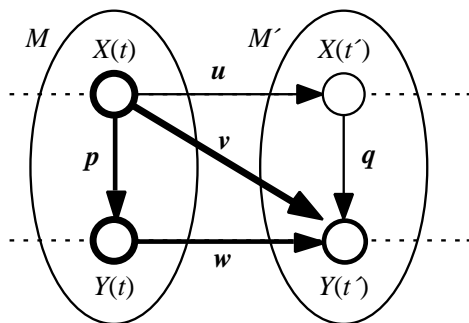


図2

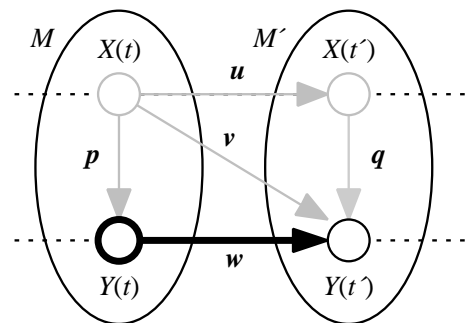


図3

この図で、 $v = \text{BREAK}[+\text{accusative}, +\text{causative}]$, $w = \text{BREAK}[-\text{accusative}, -\text{causative}]$ であり、 p は対格性を表す成分である。 $Y(t)$ には $Y(t')$ より強いプロファイルがある。

u, v, w, p, q のような成分は意味成分、あるいは意味ベクトルと呼ばれる。この成分の合成・分解によって複合的意味が表現される。黒宮 (投稿中) は図2-図3のような IDTM の図が Langacker の図と直接の比較し、この点を語彙分解 (McCawley 1971) に関連させて興味深い分析を提案している。

次の図4は結果述語が共起した(2)aの意味構造を示し、図5は(2)c, dの対比にある具格前置詞句と道具主語文との対応を示すものである (結果述語成分にはぼかしを入れた)。

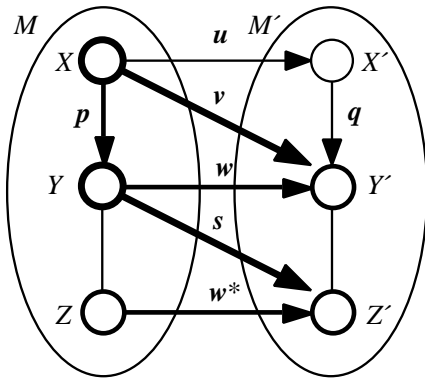


図4

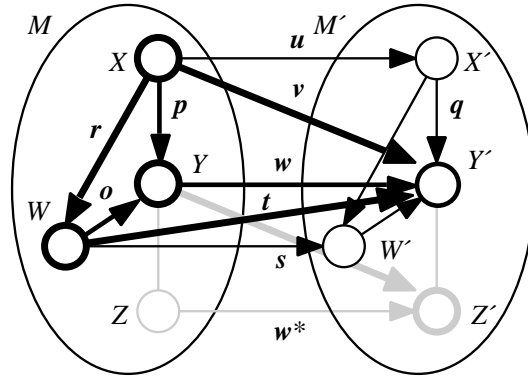


図5

この図で、 $v = \text{BREAK}[+\text{accusative}, +\text{causative}]$, $w = \text{BREAK}[-\text{causative}, -\text{accusative}]$, $s = \text{INTO}$, BECOME , $r = \text{WITH}$; $t = \text{BREAK}[+\text{instrumental}]$ である。 $\langle v, t \rangle$, $\langle p, o \rangle$ はおのこの対応関係にある。

2.2 記述の言語非依存性

IDTM は日本語の格助詞の役割も自然に表現する。これを示すために、(3)にある「壊す」と「壊れる」の自他形式の交替を、(2)にある例との対比で考察する。

- (3) a. X が (W で) Y を壊す
- b. Y が (W で) 壊れる
- c. ?W が Y を壊す

IDTM では、(3)a, bの自他交替は、次の図式化によって特徴づけられる。

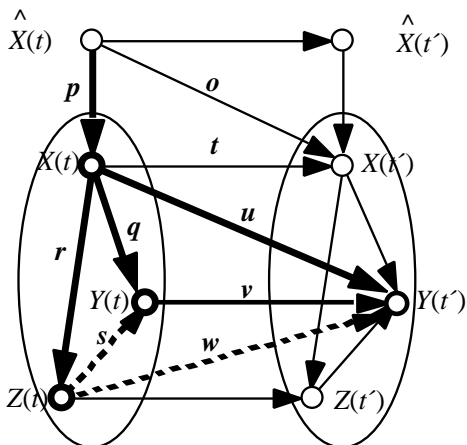


図6

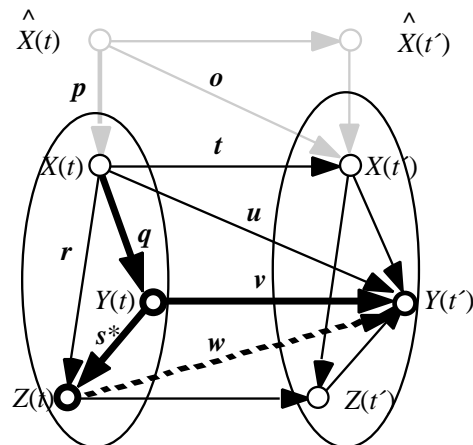


図7

図6と図7ともに格助詞は p, q, r, s で、動詞的成分は u, v, w である。図6では $p = \text{'-が'}$, $q = \text{'-を'}$, $r = \text{'-で'}$ (道具格), $u = \text{'壊す'}$, $v = \text{'壊れる'}$ である。図7では $q = \text{'が'}$, $s^* = \text{'で'}$ (原因格), $v = \text{'壊れる'}$ である。特に q が '-が' と '-を' の交替形式をもつこと、 s と s^* とが逆の向きをもつことに注意されたい。 \hat{X} のような要素が M の外部に出ている理由は、紙面の都合上割愛する。

(3)b で Z は具格より原因格のほうが解釈しやすいのと、(3)c が不自然な表現だという点で「壊す」と *break* との間に完全な並行性はない。

参考文献

- Croft, William (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago, IL: University of Chicago Press.
- Fauconnier, G. R. (1985) *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge, MA, MIT Press.
- _____ (1997) *Mappings in Thought and Language*. Cambridge, MA, Cambridge University Press.
- 黒田 航 (投稿中) 「意味構造記述のための制約された図法を求めて: ID 追跡モデルの提案」(『言語研究』)
- 黒宮 公彦 (投稿中) 「ID 追跡モデルの有効性」(日本認知言語学会2003年大会発表応募論文)
- Langacker, R. W. (1987). *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- _____ (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive Application*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- _____ (2000) *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- McCawley, James D. (1971) Prelexical syntax. In: Peter A. M. Seuren (ed.) *Semantic Syntax*, 29-42. London, Oxford University Press.
- 定延利幸 (2000) 『認知言語論』東京: 大修館.